

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°46 ドメーヌ・モス

生産地方：ロワール

新着ワイン5種類♪

VdF マジック・オブ・ジュジュ 2021 (白)

2021年は、春の遅霜によりアンジュのどの生産者も収量を減らす中、買いブドウ生産者のドメーヌ・デュ・ヴェルジェは霜よけの移動扇風機があったおかげで霜からうまく畑を守ることができ、結果 50hL/ha と豊作とも言える収量を確保できた。ジョゼフ曰く、シュナンのきれいな酸を残すために、敢えてソーヴィニヨンブランと同じタイミングで収穫を行なったとのこと。醸造は、フレッシュさを残すためにソーヴィニヨンブランはステンレスタンク、一方シュナンは酸の鋭さがあまりにも際立っていたので、酸の角を取るために樽で仕込み最後にアッサンブラージュした。出来上がったワインはヴィヴィッドで、まるで搾りたてのレモン果汁のようなまっすぐ伸びるシャープな酸が魅力的な味わいに仕上がっている！鋭い酸に乗った塩気のある旨味も心地よく、レモン代わりに生ガキやカルパッチョなどと合わせたい超キレッキレなワインだ！

VdF シュナン 2021 (白)

2021年は、春の遅霜によりブドウが大幅減収…。だが品質的には、夏が涼しくブドウにしっかりと酸が残ったおかげでワインはいつもよりエレガントでピュアな味わいに仕上がっている！ジョゼフ曰く、普段のシュナンはタンク醸造だが、この年は全体的に収量が少なく醸造樽が余っていたことと、また、エッジの効いた酸の角を取るために100%樽で仕込んだとのこと。出来上がったワインはピュアかつミネラリーで、アルコール度数13%とは思えないクリスタル感がある！また、いつもよりも果実がスレンダーな分、味わいにシスト土壌から来る剥き出しなミネラルをダイレクトに感じる！シャープでキレのあるクリーンな味わいは、まさにアンジュのピュリニー・モンラッシェ！？

VdF ラ・ジュット 2021 (白)

2021年は、ブドウが春の遅霜の被害に遭い収量が大幅に減った年。ジョゼフ曰く、ラ・ジュットを初リリースした当初はシュナンとシャルドネの収量比率が大体50:50だったのだが、年々若木のシュナンの収量が増加しているため、今は大体80:20と相対的にシュナン主体の比率に収まっているとのこと。醸造は全て古樽発酵&熟成でそれぞれ別々に仕込み、最後にアッサンブラージュして瓶詰め。出来上がったワインは前年よりも酒質がスレンダーでフィネスがあり、まるで海水で貝のダシを取ったようなソルティな旨味が口に広がる！今回リリースするワインはどれも上品に仕上がっているが、その中でもラ・ジュットは一番味わいに波動と底力があり、飲み頃ワインとしての完成度が非常に高い！

VdF ル・ルシュフェール 2021 (白)

2021年は、ブドウが完熟した上にきれいな酸の残った当たり年！また、大規模な春の遅霜による被害が遭った中でル・ルシュフェールは、この年に設置した霜よけの風車が功を奏し被害を大幅に防ぐことができた！醸造は、全体の収量が少なくフードルも樽も余っていたので、白で一番収量の取れたル・ルシュフェールは、前年イニシャル・カルボに使用した容量の一番大きい25hLのフードルで発酵熟成させた。出来上がったワインは上品でフィネスがあり、高級ダシのような澄んだ旨味エキスとその後広がる塩気のあるミネラルとのバランスが超絶妙！アルコール度数は13%もあるのに、きれいな酸があるおかげか、いつものボリューム豊かなル・ルシュフェールとは異なる上品なクリスタル感が醸し出されている！

VdF カベルネフラン・ヴィンテージ 2018 (赤)

VdF カベルネフランを長く熟成しワンランク上のワインに仕立てたカベルネフラン・ヴィンテージ！このワインをつくるきっかけは、ロワールのカベルネフランが苦手なジョゼフとシルヴェストルが唯一美味しいと思えるカベルネが父親ルネのオールドヴィンテージワインであったことだった。「熟成したカベルネの魅力を変えてこの特別なワインを仕込んだ」とジョゼフは言う。仕込む条件は、まずカベルネが当たり年であること、そしてカーヴでの瓶熟期間も含めて最低3年は寝かせること。2018年は、質量共に恵まれた当たり年だった。ジョゼフ曰く、直近では2017年、2015年がカベルネの当たり年だが、それを超えるポテンシャルがあるとのこと。醸造は、マセラシオン・カルボニックを行わず全てブドウを除梗しクラシックな方法で仕込んだ。古樽で10ヶ月熟成し、さらにフードルで14ヶ月、またさらにカーヴで1年瓶熟させてからリリースした。出来上がったワインは柔らかく、熟成による絶妙なまろやかさも、こなれた果実の凝縮味がとろけるように優しく口に染み入る！塩気のある旨味もしっかりとあり、余韻を優しく引き締めるタンニンも心地よい！まさに今飲み頃を迎えた、これからどんどんワインが開いてきそうな美味しいカベルネフランだ！

ミレジム情報 当主「ジョゼフ&シルヴェストル」のコメント

2018年は、久々に収量に恵まれた当たり年！また、前年同様収穫が例年よりも早かった。冬は暖冬で春の芽吹きは早かったが、遅霜がなくスタートは順調だった。6月まで雨が多く、途中ミルデューが猛威を振るい、ブドウの房に1割程度影響はあったが、ただ、全体的に房の数が多かったため、結果として収量には大きな影響がなかった。開花時も雨の影響なく順調に終わった。6月からは一転、雨の降らない乾燥した天気が続いた。雨は収穫の終わる10月終わりまでほとんど降らず、また、7月の終わりと8月初めに猛暑に見舞われ、一時は2015年のような日照りによるブドウの果汁減が心配された。だが、実際蓋を開けてみると、春に降り続いた雨のストックが地中に十分あったおかげで水不足に苦しむことなく、結果的に腐敗ひとつない、果汁をたっぷり含んだ素晴らしい品質のブドウを収穫できた！

2021年は、春の遅霜とミルデューによりブドウの収量が大幅に減ったとても厳しい年だった。4月5日から8日にかけてアンジェー帯に寒波が降りた。早朝の気温は-4℃~-7℃まで下がり、主芽はほぼ全滅。霜によるブドウの減収は30%~40%に及んだ。また5月、6月は気温の上がらない雨の多い不安定な天候が続き、ブドウの成長は前年よりも1ヶ月ほど後れを取った。畑ではミルデューが猛威を振るい、霜の被害も合わせると減収は40%~70%に及んだ。7月中旬になると雨も止み再び太陽が戻ってきたが、気温は穏やかで、ブドウの成熟にも時間を要した。最終的に総収量は前年に比べて1/4まで落ちたが、品質的にはフェノールが熟し酸の乗った素晴らしいブドウが収穫できた。

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

6月終わりに、まだカーヴで熟成中の2022年ワインの状態と今年のブドウの生育状態をチェックしにモスを訪問した。2022年のワインはほぼ全てのキュヴェの発酵が終わり熟成の段階に入っていた。主に白を試飲させてもらったが、どれも味わいはクリーンで醸造上の欠点はほとんどなかった。2020年を彷彿させるような骨格のしっ

かりとしたフィネスあるワインに仕上がりそうでテンションが上がる！今回日本でリリースする2021年ワインに然り、高いレベルでの品質の安定と年々着実に腕を上げるジョゼフとシルヴェストルの醸造技術には唯々驚くばかりだ。

試飲が終わり次にジョゼフの車で畑を一通り回った。これは一昨年ル・ルシュフェール畑の前に設置した霜よけの大型扇風機。(写真①)ここ近年アンジェー帯を毎年のように襲う霜の被害に対抗するために一昨年、今年と合計4台畑に設置した。ちなみに、この大型扇風機、1台600万もするそうだ。4台で合計2400万の大型投資となるが、これから新しいカーヴ建設もあり資金繰りは大丈夫なのだろうか…？その疑問に対し「CUMAを利用しているので2400万全てを支



(写真①) 新たに導入した霜よけの大型扇風機

払うわけではない。実際はその半分程度だ」とジョゼフは答えてくれた。CUMA とは Cooperatives d'Utilisation de Materiel Agricole（農業機械利用協同組合）の略称で、高価な農業機械を買う際に CUMA を介して生産者がお金を出し合い、機械を共同で使用することによって所有費用を抑えるという大変便利な制度だ。「この大型扇風機 1 台に対し大体 2ha の広さを霜から守ってくれる。扇風機を設置する場所によっては隣人の畑に被る場合もあり、そういう時は CUMA による共同使用のメリットを隣人に説明してまわり、分担してもらうことで購入資金を抑えることに努めた」と彼は語ってくれた。ジョゼフとシルヴェストル…まだ若いのになかなかのやり手だ。

彼等自身、大型扇風機の投資は将来的に見ても投資価値は十分にあると読んでいる。「その証拠に、今年も 4 月にアンジェー帯に寒波が降りたが扇風機を回した畑は霜には当たらず、扇風機のまだ設置されていなかったレ・ボンヌ・ブランシュの畑だけが唯一霜の被害に遭った」と、ジョゼフはまず扇風機により被害を防ぐことのできたル・ルシュフェールの畑を案内してくれた。

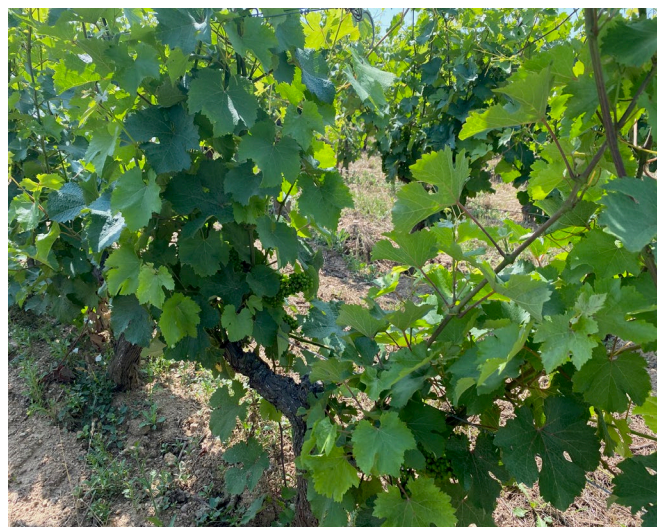
これはル・ルシュフェールの樹齢 40 年のシュナン。(写真②) 確かに、見た目もブドウがたわわに実っていて豊作を予感させる！しかも、扇風機設置場所から 50m ほど離れているのにこれだけの房が残っているとはもう驚きのひと言！

それにしても、扇風機で霜を防ぐって一体どのようなメカニズムが働いているのだろうか？熱風を送るのは理解できるが、こんな 50m も離れた、いや 200m も離れた場所までカバーできるってどういうこと？意外にその仕組みをいまいち理解できていない中で「扇風機で霜を防ぐことができる！」なんて知ったかぶりをしていた自分がいたので、この機会にジョゼフに仕組みを簡単に説明してもらった。彼が言うには、



扇風機が 2ha の範囲をカバーすると言っても、扇風機の熱風が直接 200m 先に届くというわけではなく、扇風機が吹き出す風によって近くに溜まった地表の冷たい空気が暖かい空気と混ざり乱流を起こし、その乱流（空気の流れ）が雪だるま式に扇風機から正面の距離では約 200m、扇風機の左右方面には約 50m ずつ冷たい空気の停滞層を壊し、その空気の流れが霜を防ぐのに重要とのことだ。つまり、扇風機の目的は空気を暖めることではなく滞った冷たい空気を動かすことで、今回、的確に乱流を生み出した結果がこのル・ルシュフェールの畑ということだ。

次に、今回扇風機設置が間に合わなかったレ・ボンヌ・ブランシュの畑に向かった。これは霜に当たったレ・ボンヌ・ブランシュのシュナンの木。(写真③) 2021 年に比べたら被害が軽度で、見た目ではブドウの房もそれなりに付いていたが、それでもル・ルシュフェールに比べたら明らかに少ないのが分かる。ジョゼフが言うには、他の



畑と比べて 30%~50%減は確実とのこと。「本来であれば去年の秋にはレ・ボンヌ・ブランシュにも扇風機が設置されている予定だった。だが、ウクライナ戦争などの影響で部品調達が大幅に遅れてしまい残念ながら今年の春までに間に合わなかった。この霜により既に 100 万~200 万の損失が出ている…」と彼は悔しさを顔ににじませながら語ってくれた。

確かに、大型扇風機は高価な設備投資かもしれないが、これだけはっきりとした成果の違いが出るのであれば、長い目で見て投資に値するものだと、今回畑を見てはっきり感じた。

(写真③) 設置が間に合わず被害があったレ・ボンヌ・ブランシュ

(2023.6.26.ドメーヌ突撃訪問より)

※弊社HP「フォト・ギャラリー」より、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ